

2025年10月7日

アジア研究図書館

アジア研究図書館共催シンポジウム “The Libraries and Archival Practices
in the Early Modern Eastern Islamic World” の開催 (森本 一夫) 1

アジア研究図書館主催ワークショップ「アースターネ・ゴドゥスのサファヴィー朝期
文書群:類型論的検討」の開催 (森本 一夫) 4

アジア研究図書館の配架状況 9

アジア研究図書館利用案内

次号の予定

編集後記

編集・発行: 東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門
(RASARL)

〒113-0033

東京都文京区本郷7-3-1

東京大学附属図書館 アジア研究図書館担当

asialib@lib.u-tokyo.ac.jp

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

アジア研究図書館共催シンポジウム
“The Libraries and Archival Practices in the Early Modern
Eastern Islamic World”
の開催

森本 一夫
(東洋文化研究所)

去る 2025 年 3 月 20 日 (木)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) を会場として、シンポジウム “The Libraries and Archival Practices in the Early Modern Eastern Islamic World” が開催された (オンライン併用)。アジア研究図書館は、会場を提供した AA 研とともに、共催機関としてその企画から実施にいたる過程に参画した。以下は簡単な開催報告である。

このシンポジウムは、AA 研の神田惟氏とミュンスター大学の Philip Bockholt 氏との構想に淵源を持つが、アジア研究図書館が 2024 年 3 月にイランのアースターネ・ゴドゥス・ラザヴィー図書館・博物館・文書館機構 (「アースターネ・ゴドゥス・ラザヴィー」はシーア派のイマーム・レザーの廟所を指す; 以下、レザー廟図書館機構などと略す) との間に覚書による研究協力関係を結んだことにより、アジア研究図書館に研究開発部門兼務教員として所属する筆者も「一枚噛む」ことになった。レザー廟は、何世紀もの歴史をもつ大図書館と発達した運営機構により、「近世東方イスラーム世界」の「図書館と文書管理に関わる実践」を考える際の重要な研究対象となる。また、図書館機構の一部をなす文書館で館長を務める Elaheh Mahboub 氏をはじめ、当該分野の研究者を抱える研究機関でもある。協力覚書の締結を終え、次はそれに実質を与えることが責務となっていた筆者と神田・ボクホルト両氏との間には、期せずして Win-Win の協働関係が成立していたのである。シンポジウムに合わせてのレザー廟からの研究者の招聘、それと組み合わせたマフブーブ館長を講師とする文書学ワークショップの開催、この二つの計画が、アジア研究図書館のなかで急速に進むこととなった (ワークショップについては当ニューズレター内で別途報告する)。

最終的に世に出たシンポジウムの案内は下記の通りである (各発表の要旨は割愛したが、おそらくかなりの間、ネット検索によりご覧いただけるであろう)。レザー廟からは、マフブーブ氏に加え、同じく廟附属の機関であるイスラーム研究所 (Bonyād-e Pazhūpesh-hā-ye Eslāmī) の所員で学術交流部門長である Behzad Nemati 氏が来日し、マフブーブ氏と共同発表を行った。当日の司会は、アジア研究図書館だけでなく後援二組織とも関係する筆者が務めた。

サファヴィー朝下のイランに関わる報告 3 本とムガル朝下のインドに関わる報告 1

本はいずれも同時代の手書き資料を素材とした着実な研究の成果であり、聴く者をワクワクさせるような鮮明さで「近世」の「イラン+インド=東方イスラーム世界」における実践を描き出すものであった。レザー廟勢の発表も、あまりに興に乗りすぎてマシガントークとなり、ペルシア語を得意としない聴衆から事後に司会が叱られたというエピソードを生みはしたが、そのことが示すように非常に充実したものであり、招聘の実務を担った筆者も鼻高々であった。会場に 18 名、Zoom 上に 19 名という参加者数も悪くなかったが、事後に聞いたところでは、時間を間違えたという海外からのオンライン参加予定者が複数いたらしい。やや残念なことである。

このシンポジウムの成果は、さらに数本の研究を加えた上で某国際査読誌に特集号として投稿される予定となっている。会の終わりには、総合コメントを担当したバンベルク大学の Christoph Werner 氏により今後の課題も提起されたが、それも踏まえて作成される最終成果が楽しみである。題名はシンポジウムと同一になるとは限らないが、神田氏とボクホルト氏の名前などで検索すれば、刊行後の特集号を見つけることは簡単であろう。

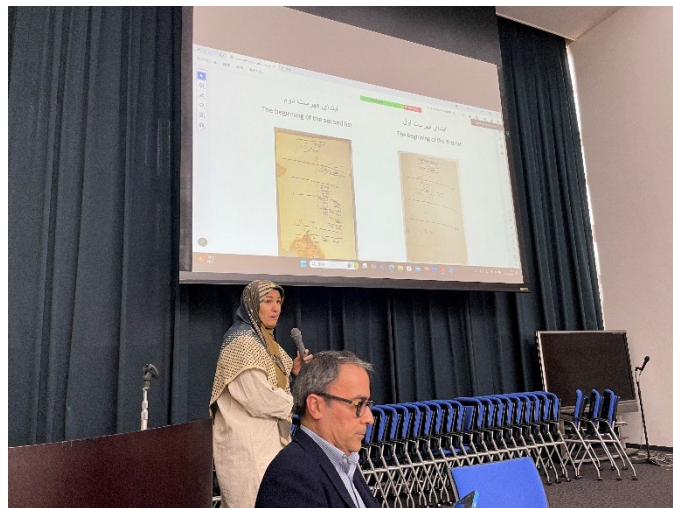


図 1 : シンポジウムで発表するレザー廟勢
(左がマフブーブ氏、右がネーマティー氏)

シンポジウム名 : “The Libraries and Archival Practices in the Early Modern Eastern Islamic World”

場所 : 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所大会議室、オンライン会議室

日時 : 2025 年 3 月 20 日 (木) 13:00~18:30

開催趣旨 : Libraries and archival practices played a pivotal role in shaping the intellectual, cultural, and religious landscapes of the pre-modern Islamic world. Since the early 21st century, substantial research on libraries and book culture, based on manuscripts and documentary sources, have emerged, particularly within the fields of Arabic and Turkish historical studies. However, comparable scholarship focusing on other regions of the Islamic

world, notably Iran and India, remains relatively underexplored. This symposium aims to address this gap by bringing together scholars from the UK, Iran, Germany, and Japan to examine the complex histories of manuscript provenance, endowments, library cataloguing, and preservation in early modern Iran and India. Through these investigations, the symposium seeks to deepen our understanding of the cultural, intellectual, and religious dynamics of book culture in these regions and its broader significance within the Islamic world.

Program:

Chair: Kazuo Morimoto (Institute for Advanced Studies on Asia/Asian Research Library, The University of Tokyo)

13:00–13:10 Introduction: Yui Kanda (ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies)

13:10–14:10 Philip Bockholt (University of Münster): Four Centuries Later: Tracing Shah ‘Abbās’s Book Endowments to Ardabil in Istanbul

14:10–14:20 Break

14:20–15:20 Yui Kanda: Shāh ‘Abbās I’s Manuscript Endowments and Shrine Practices: Early Kufic Qur’āns Endowed to Mashhad and Ardabil

15:20–15:30 Break

15:30–16:30 Elahe Mahbub (Organization of Libraries, Museums and Document Center, Astan Quds Razavi) and Behzad Nemati (The Islamic Research Foundation, Astan Quds Razavi): Barrasī-ye kohan-tarīn fehrest-hā-ye bejāmande az Kitābkhāne-ye Astān-e Qods-e Razavī (in Persian)

16:30–16:40 Break

16:40–17:40 Andrew Peacock (University of St Andrews): The Library of the Eighteenth Century Mughal, Acchai Sahib

17:40–17:45 Break

17:45–18:30

General Discussion

Discussant: Christoph U. Werner (University of Bamberg)

共催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（共催課題「中近世西アジアにおける史的テキストの参照・改変・転用とその主体・受容者についての国際的・学際的研究」・基幹研究「『記憶』のフィールド・アーカイビング：イスラームがつなぐ共生社会の動態の解明」）・東京大学アジア研究図書館

協賛：Association for the Study of Persianate Societies 日本事務所・東京大学東洋文化研究所（班研究「ペルシア語文化圏研究」）

アジア研究図書館主催ワークショップ「アースターネ・ゴドゥスのサファヴィー朝期文書群：類型論的検討」の開催

森本 一夫
(東洋文化研究所)

アジア研究図書館は、去る 2025 年 3 月 22～23 日（土日）の両日にわたり、ワークショップ “Gūne-shenāsī-ye Asnād-e Āstān-e Qods dar ‘Asr-e Safavī”を開催した（上記のワークショップ名日本語自由訳は筆者による）。本稿ではその開催報告を行う。



図 1：語る講師と見入る「生徒」たち

このワークショップは、2024 年 3 月にアジア研究図書館がマシュハド市（イラン）のアースターネ・ゴドゥス・ラザヴィー図書館・博物館・文書館機構（「アースターネ・ゴドゥス・ラザヴィー」はシーア派のイマーム・レザーの廟所を指す；以下、レザー廟図書館機構などと略す）と研究協力に関する覚書を取り交わしたことの直接的な成果である。図書館機構の一部をなすレザー廟文書館の館長を務める Elahch Mahboub 氏は同文書館に所蔵される文書史料に関する研究、それらを用いた歴史研究の双方で知られる脂の乗り切った研究者である。もはや正確にいつからと言うことはできないが、筆者には、マフブーブ氏を講師としてレザー廟関係の文書史料を扱う企画を立てれば、国内外から専門の研究者を集める、真に学問を進めるイベントにできるであろうという読みないし目論見があった。本ニューズレター掲載の別稿に開催報告を記す 3 月 20 日のシンポジウムの企画に参画するなかで、この読み／目論見が具現化していった結果がこのワークショップである。

レザー廟の文書館には、同廟の運営をめぐってサファヴィー朝期（1501～1722 年）に作成された文書史料がおよそ 7 万点所蔵されている。これらの文書史料は、当時すでに莫大な寄進財産を保有していたレザー廟の運営に関する研究の基盤となるだけでなく、そのアーカイブが伝存しないサファヴィー朝の行政組織における実務のあり方を考える有効な材料ともなる。サファヴィー朝期のレザー廟は、宗教政策の要の一つとして国家の強力な保護と統制のもとに置かれており、「国営」ないし「準国営」と言えるような性格を持っていたからである（それはイスラーム共和国体制下の現在も同じである）。文書群の重要性は、レザー廟文書館所蔵の文書群が、特にサファヴィー朝期の史料を含むことを理由に世界記憶遺産に登録されていることから窺うことができる。



図 2：語る講師と聞き入る「生徒」たち

ワークショップの門構えについて当初迷いがなかったと言えは嘘になる。一番悩ましく思ったのは会の言語をどうするかであった。マフブーブ氏はペルシア語で話すというのは所与の条件であったが、それに日本語の通訳をつけるかどうか、そこが考えどころであった（英語通訳という線は調達ができるかどうかははっきりせず早々に諦めた；日本語通訳という場合には、筆者をはじめ、国内からの参加者による「強制ボランティア」でどうにかなると思われた）。日本語通訳をつければ間口は広がるが、内容は半分になる。さらに、日本語話者以外の参加者にとっては時間の半分以上が無駄な時間になる。色々考えたが、アジア研究図書館が主催するイベントであるからには研究上の効果追求を貫こうと心に決め、ペルシア語一本で通訳なしということにした。結果的には、会場として予定していたアジア研究図書館開架フロア・レクチャールームの定員（18 名）を満たす対面参加者があり（講師を含めた内訳は、日本 11、イラン 3、イギリス 2、ドイツ 2）、後に募集したオンライン参加に申し込んできた 4 名（ドイツ 2、イギリス 1、オーストリア 1）も全員が日本語話者ではなかったのも、ペルシア語一本としたことは大きな間違いではなかったのではないかと考えている。

マフブーブ氏はイラン国内でも数々の場で文書学関係のセミナーやワークショップの講師を務めてきただけあり、そのパフォーマンスは見事なものであった。サファヴィー朝期のレザー廟で作成された各種の文書について、外形的特徴、書式、機能など、多面にわたる考察を次々に披露していく。その過程では適時に参加者を指名し、文書のテキストを読ませる。読める参加者、読めない参加者への対応も手慣れたもので、この人は今すぐ小学校の先生をやってもそつなくこなしてクラスをまとめるだろうな、などと思われた。



図 3：当てられて文書を解読する「生徒」

参加者も立派であった。筆者は文書研究を専門としているわけでもなければ普段から文書史料を使った研究をしているわけでもない。ついでに言えばサファヴィー朝もプロとしては専門外である。したがって、筆者個人としては耳学問をこえる学びは望むべくもなかった。しかし、開催責任者としては、普段から文書学や文書研究に従事している一群の参加者が、子供のように目を光らせ、随時の多方向的なやりとりを通じて知見を交換し、お互いを高めている姿に大いに「報われた感」を持つことができた。



図 4：子供のように目を光らせる「生徒」

現在、国際政治の全般的な状況は、イランと「西側諸国」の間の学術交流に有利なものではない。その中で、日本の関連研究者のコミュニティは、日本とイランの間の伝統的な友好関係という得がたい基盤を享受しており、そのことにより果たせる役割もある。日本に舞台を設定することでイランの学界と世界の学界との血の通った交流を促進することは、明らかにその一つである。今回のワークショップは、ささやかながらそのような場としても意味をもつものであったと思う。このことは、ワークショップに参加したバンベルク大学の Christoph Werner 氏による、今回の企画についての以下のコメントも指摘するところである。

It was with great pleasure that I participated in the two-day intensive workshop on the typology of Safavid administrative documents conducted by Elaheh Mahboub. The workshop was taught entirely in Persian, which is remarkable in itself, as it allowed both Japanese and non-Japanese participants to participate without the need for translation. It can truly be called a landmark event that really helped to advance scholarship internationally, and the organizers should be praised and applauded for their efforts in bringing us all together. The high level of discussion and specialization was outstanding, as expertise in administrative history, diplomacy, Shiite Islamic law, paleography, and special scripts such as the accounting method of *siyâq* were required and necessary. Given the sanctions imposed on international travel and academic cooperation with Iran in most European countries and the United States, this event organized with the Asian Research Library in Japan showed that it can act as a bridge between the Iranian academic community and its counterparts elsewhere. Truly, such an event would not have been possible anywhere else at the moment. Together with the other participants, I am very much looking forward to the publication of the book based on this workshop by Elaheh Mahboub.

このワークショップの最大の成果は、講師を務めたマフブーブ氏自身と参加者のそれぞれが得た、研究上の刺激とそれによる成長であったと言えよう。そしてそれは、二日間の学びの場を共有した者たちがこれから世に問うていくであろう、より幅広い知見とより深い洞察を反映した研究成果に反映されていくはずである。報告を閉じるにあたり、そのような研究成果の主要な第一弾として、このワークショップにもとづくマフブーブ氏の著書が準備されつつあることに触れておきたい（上でヴェルナー氏が触れているのがこれである）。この本は—インシャッラー（神が望みたまえば）—アジア研究図書館叢書の 1 冊として、2025 年度中に印刷版と電子版の双方で世に出る計画となっている。ワークショップの実りを一回限りのものとするのではなく、さらに世界の関連研究者コミュニティに益を及ぼすべく、この仕事もしっかりやり遂げたいと意志を固めているところである。

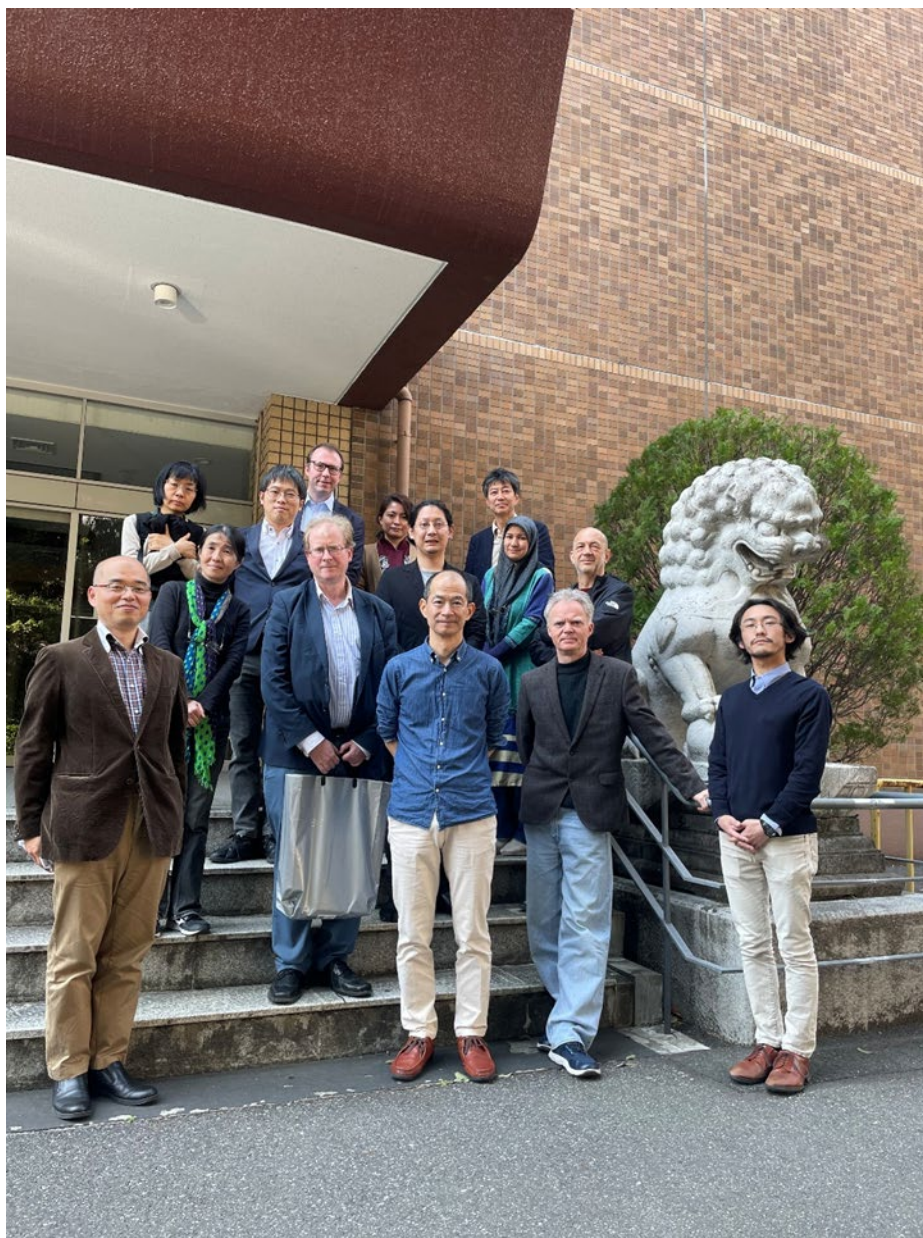


図 5 : 集合写真 (全員とはいかなかったが)

アジア研究図書館の配架状況

アジア研究図書館は、新規購入資料や研究者・機関からの寄贈資料の収集に加え、従来は各部局が保有してきたアジア関係諸資料を可能な限り集約し運用することで、より効率的な図書館サービスを提供することを目標のひとつとしています。

移管資料のうち、開架への配架資料の移管は令和元年度から開始され、令和 5 年 4 月に無事終了しました。自動書庫への移管は令和 4 年度から開始され、同 11 年までの入庫計画に沿って移管事業を進めています。同時に、大口の寄贈資料の登録も順調に進めてきています。

以下の表は令和 7 年 10 月 1 日時点での、購入資料をはじめとする資料の総数と配架の状況とを示したものです。令和 5 年 5 月 1 日時点での所蔵資料の詳細な分析はニューズレター第 13 号で行っていますので、合わせてご参照ください。

地域等分類 (含・大型本)		配架場所				合計
		4F 開架	自動書庫	保存書庫	その他 (要申込)	
1	アジア	3,106	2,222	0	0	5,328
2	東アジア	10,330	19,152	19	0	29,501
3	東南アジア	4,386	3,877	0	0	8,263
4	南アジア	5,753	8,243	45	0	14,041
5	中央ユーラシア	4,708	330	0	53	5,091
6	西アジア	6,479	3,858	0	0	10,337
R1	参考図書 (ア)	32	4	0	0	36
R2	参考図書 (東)	404	3	0	0	407
R3	参考図書 (東南)	235	20	0	0	255
R4	参考図書 (南)	310	8	0	0	318
R5	参考図書 (中央)	182	2	0	0	184
R6	参考図書 (西)	234	0	0	0	234
TRCCS	台湾漢学リソースセンター蔵書	913	0	0	0	913
製本雑誌		0	1,084	0	0	1,084
貴重図書・準貴重図書		0	0	0	6	6
合計		37,072	38,803	64	59	75,998

アジア研究図書館利用案内

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/user-guide>

場 所	総合図書館4階
開館日／閉館日	総合図書館の開館日・閉館日に準じます。
開館日	以下閉館日を除くすべての日
閉館日	年末年始(12月28日～1月3日) 定例休館日(おおむね毎月第4木曜日) 夏季の一斉休業日(2日間) 試験等大学行事のための閉館日 その他臨時閉館日

開館時間

	曜日等	通常期	8月・3月
	月～金曜日	9:00～22:30	9:00～21:00
	土・日・祝日	9:00～19:00	9:00～17:00

学外の方もご利用いただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/user-guide/outside/gakugai>

次号の予定

第22号は令和8年1月9日に発行予定です。

ニューズレターへの情報提供、投稿や、記事へのご要望があれば、東京大学アジア研究図書館([asialib\[at\]lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:asialib[at]lib.u-tokyo.ac.jp))までお知らせ下さい。

編集後記

第21号をお届けします。

私が研究対象とする宗教は、「地水火風も触覚のみを有する生命体である」という考えが大前提ですが、この生命観を入門したての信者に理解させることはたやすくなかったようで、それを論理的に実証(!)しようという動きがあったことに最近気づきました。関連の記述を網羅的に集めようとしつつありますが、さて一体どういう類の文献にそんな議論が書かれているのか、雲をつかむような話です。ちなみに、大規模デジタルコーパスは残念ながら存在しません。(J)